



THE SUGGESTION

提 言

中小企業組合総合研究所機関紙

6月1日

第245号(2026年)

発行所

一般社団法人 中小企業組合総合研究所

〒530-0043 大阪市北区天満1-6-8 六甲天満ビル801

電話 06-6809-6634 FAX 06-6881-0782

URL <http://www.kumiaisouken.com/>

提言・約束事

1. 基本的には読者参加型の提言新聞とします。併せてニュース解説や話題を提供します。
2. 投稿の場合、社会規範に反するものは受付けません。原稿掲載はスペース等の関係もあり編集者の判断にお任せ下さい。

「戦争をしない国」であり続けるために 憲法施行から79年、平和憲法を護れ

日本国憲法が施行されてから79年。戦後日本は、あの悲惨な戦争への深い反省の上に、「戦争をしない国」を理想として掲げ、平和主義を国家の根本原理として歩んできた。しかし現在、その平和主義は大きな岐路に立たされている。高市政権は武器輸出政策を「原則禁止」から「原則容認へ転換し、改憲にも強い意欲を示す。改憲勢力は「憲法と現実の乖離」を理由に、「国防軍」保持や緊急事態条項創設を進めようとしている。だが、憲法とは本来、国家権力を縛り、国が目指す理想を示すものであるはずだ。「戦争放棄」「基本的人権の尊重」「民主主義」、これらは、戦争で国家が暴走し、多くの命と自由が奪われた歴史の反省から生まれた。「現実には合わないから変える」のではなく、「憲法の理念に近づく努力をする」のが本来の政治の責任ではないのか。いま改めて問われているのは、日本がこれからも「戦争をしない国」であり続ける意思を持てるのかどうかである。

戦争の反省から生まれた憲法

日本国憲法は、単なる法律の集合ではない。そこには、二度と戦争によつて国家を暴走させないという、戦後日本の強い決意が込められている。かつて日本は、「国のため」という名の下にアジア

諸国への侵略戦争を進め、多くの命を奪った。そして日本国民自身もまた、空襲や沖縄戦、原爆投下など、未曾有の惨禍を経験した。戦争は兵士だけでなく、名もなき一般市民の日常と人生を容赦なく破壊したのである。

だからこそ戦後、人々は「二度と戦争をしてはならない」という強い思いを共有した。その象徴が憲法9条である。「戦争放棄」「戦力不保持」「交戦権否認」、この理念は、単なる理想論ではない。戦争の悲惨さを身をもって知った人々が、「国家は時に暴走する」という現実を踏まえ、その歯止めとして憲法に刻み込んだものである。つまり9条とは、国家への命令書なのだ。

「憲法と現実の乖離」という危うさ

改憲論者が繰り返しているのが、「憲法と現実の乖離」という言葉だ。「自衛隊は現実には存在し、安全保障環境も厳しくなっている。だから現実に合わせて憲法を改正すべき」という理屈である。だが、この考え方には大きな危うさがある。そもそも憲法とは、現実を追認するためのものではない。国家が向かうべき方向、つまり理想を示すためのものだ。例えば、「基本的人権の尊重」も現実には完全には実現されていない。貧困、差別、言論への圧力など、人権侵害は今も存在する。しかし、「現実には人権侵害があるから人権条項を後退させよう」とはならないはずだ。平和主義も同じである。戦争の危険があるからこそ、戦争を防ぐ努力を最大限行なう。その理想を掲げ続けるために憲法が存在している。

「国防軍」化が意味するもの

日本維新の会は9条2項を削除し、「国防軍」の保持、軍事裁判所設置まで提言している。加えて、武器輸出の「原則容認」は、日本を「武器を作り、輸出し、利益を得る国」へと変えていく危険性を孕んでいる。軍需産業が国家経済と結びつけば、「平和であること」より、「軍需市場を維持すること」が政治的利権になる。可能性もある。戦前の日本もまた、軍事と経済、政治が結びつく中で戦争への道を進んだ。「軍事力の強化が国家の中心課題になる社会」が、自由や民主主義に大きな圧力をかけることは、歴史が何度も示してきた。

緊急事態条項と基本的人権

改憲論で見落としてはならないのが、緊急事態条項の問題である。災害や有事を理由に、政府権限を一時的に強化するという考え方だ。しかし、護憲派に対して、「理想論だ」「現実を見ていない」という批判が向けられることがある。だが、本



改憲派集会に高市首相のビデオメッセージが(5月3日)

当に非現実的なのは、「軍備を強化すれば平和になる」と単純に信じていることではないのか。歴史を振り返れば、軍拡競争は相互不信を生み、戦争の危険を高めてきた。戦争は、一度始まれば国家の意思だけでは止められない。犠牲になるのはいつも一般市民だ。その現実を知っているからこそ、戦後日本は「戦争をしない国」を目指したのである。憲法を守るとは、未来を守ることを意味する。

ナフサ不足が、思いがけない形で私たちの暮らしに影を落として始めている。ナフサは原油を精製する過程で得られる軽質の液体で、プラスチックや合成繊維、接着剤など多くの製品の「材料の材料」となる石油化学の基礎原料です。そのナフサの不足のため、スーパーやコンビニの棚に並ぶ商品から「色」が消えていきそうです。スナック菓子大手のカルビーは、ポテトチップスなど主力14商品のパッケージを、5月25日発送分からモノクロへ変更し、「石油原料節約パッケージ」と明記すると発表しました。

しかし、こうした企業への対応を巡って高市政権は助け舟を出そうとしません。カルビーの発表直後の閣議後の会見で鈴木農水相は、「パッケージ変更は各企業の経営判断に基づくもの」「中東情勢に伴う食料供給上の問題ではない」との見解を口にしました。7月中旬に会期末を迎える国会で高市政権は今年度補正予算を編成する方針を決めました。ガソリンや高騰する電気・ガス料金には補助金を用意する一方、ナフサ危機への支援は盛り込まれません。なぜ高市首相や閣僚たちは、現場の混乱に目をつぶって石油やナフサが「足りている」と言い張るのか。理解が出来ません。

生きるために、今、私たちは立ち上がる

第97回中之島メーデーに500人が結集

中之島メーデー実行委員会は5月1日、中之島公園剣先ひろば(大阪市北区)で「第97回中之島メーデー」を開催。「生きるために、今、私たちは立ち上がる」をメインスローガンに掲げ、初夏の日差しが降り注ぐ会場には、組合員や関係団体など500人が結集。物価高や戦争の危機、労働権利の抑圧という厳しい情勢に対し、労働者が自らの手で未来を切り拓く決意を固める場となった。

メーデーは、1886年5月1日に、一日12〜14時間の長時間労働を強いられ、アメリカの35万人の労働者たちが結集し、「8時間労働」を求めてストライキに立ち上がったのを起源としている。現在、メーデーは世界80カ国以上で行なわれ、大切な労働者の闘いの日であり祭典の日でもある。「8時間は仕事のために、8時間

多くの労働組合、市民団体、政党などの旗がたなびく快晴の空のもと行なわれた「第97回中之島メーデー」。異常な物価高騰が生活を直撃し、二部労働者には賃上げが実施



【主催者挨拶】

今、世界では戦争が各地で起こっています。特にアメリカとイスラエルが一方的にイランを攻撃し、トランプの当初の目的も大きく外れて、現在もまだ戦争を終結する事ができないという状況が続いています。あんな人間に大統領をさせるという事自体、おかしい事だったと私自身は思います。

ですが、日本の労働者である私たち、そして日本の労働組合に今、問われている事は何でしょうか。トランプに会った時に



西梅田公園に向かうデモ行進(大阪市北区・梅新東交差点で)

大はしゃぎをして、持ち上げて、媚びへつらい、そして「あなたが平和をもたせよ」と、そんなことまで言う高市、この人間を日本の代表として許している、それでいいのかという事が今、日本の労働者や労働組合に問われていると私は思います。世界の市民、イランの市民、ヨーロッパの市民はみんな「日本の労働者市民は、あんな人を許していないんですか」と思っているんじゃないでしょうか。今、私たちが声を上げなければ、戦争をするために本心に憲法が変えられてしまう。「変えられてしまうかも」でなくて、本当に変えられてしまふ、そういう時が刻一刻と迫っていると私は思います。だから今回のメーデーのスローガンも「生きるために、今、私

続けて挨拶に立った議員連盟は、「高市政権による軍事優先の姿勢を批判し、伊丹や閑空などの空港・港湾の軍事利用を許さない」と訴えた。

本年の新たな試みとして注目を集めたのが、各労働組合の新組合員がスピーチを行なう新企画の「ルーキーズ」だ。壇上の新組合員からは、労働組合に期待する事、目指す事が熱く語られ、併せて労働運動を様々な社会運動の軸として捉え直し、若手の声を運動に反映させていく抱負が述べられた。その後、厳しい闘いを続ける各団体からの争議アピールへと続いた。

労働者の団結を

争議アピール終了後、反戦、護憲などのメッセージングを歌う川口真由美さんのパフォーマンスが行なわれた。川口さんは「三つのための行進曲」「メーデー歌」「インターナショナル」などを熱唱。その魂のこもった熱い歌が会場に響きわたり、これからその後、メーデーアピ

各団体からアピール

主催者挨拶の後、参加団体から連帯の挨拶が行なわれた。大阪労働者弁護団からは、裁量労働制の拡大やサービス残業を助長するような労働時間規制緩和の動きを厳しく批判するアピールが行なわれた。



川口さんの魂のこもった熱唱



ボテッカーでアピール

社会資本政策研究会

関連団体を支援する会
KU

関西生コン関連
経営者会

悩み事相談、中小企業問題、労働問題など
ご連絡ください。秘密厳守いたします。

オールジャパン労働組合

電話(〇六)六八〇九一六三三四

提言文芸

~投稿歓迎~

・ 消費税減 とうなつた?
(荒馬宗介)

・ 平和主義 看板外して 死の商人
(花より談合)

改憲にしか興味のない首相にとつては、国民が日々1円単位で削っている「消費税」は、ただの「取るに足りない数字」に過ぎないようです。正義や平和を口にしてきた者が、保身や利益のために「看板」を掛け替える行為は、国際政治だけでなく、企業や日常の人間関係にも通じる人間の醜態です。

戦前回帰への動きを憂う 着々と進む戦争国家への道

防衛省は自衛隊幹部の階級呼称変更を進めようとしている。「国際標準化」や「分かりやすさ」を理由と説明しているが、それが本当の理由だろうか。「大将」「大佐」「工廠」といった戦前を想起させる用語の復活には、自衛隊を「普通の軍隊」へ近づけ、戦後日本が築いてきた平和国家の理念を变质させようとする政治的意図が透けて見える。

「普通の…」という危険な一歩

防衛省は、自衛隊幹部に分かりにくい「NATOの階級呼称を変更し、「1 O諸国などと表現をそろ佐」を「大佐」、「1尉」を「大尉」、「幕僚長」を「大尉」などへ改める方針を固めた。これは1954年の自衛隊発足以来、初めての大規模な呼称変更である。

政府・与党は、「国際的



1952年に自衛隊の前身である警察予備隊が発足。現在は22万人の自衛官を擁し、防衛費も世界10位(金額ベース)と、紛れもない軍隊となっている。

「軍」「兵」「参謀」などの言葉避けることで、戦前との断絶を示してきた。だからこそ「兵隊」を「隊

9条との矛盾は消えていない

日本国憲法第9条では、「戦力の不保持」を明記している。政府は長年、「自衛のための必要最小限度の実力組織」であるとして自衛隊を合憲としてきた。しかし、その説明自体、極めて苦しい解釈の上に成り立っている。実際、自衛隊は世界有数の軍事力を保有している。空母化された護衛艦、長距離ミサイル、敵基地攻撃能力など、実態はもはや「必要最小限」という言葉では説明できない段階にきている。そうした中で、「大将」「大佐」といった旧軍や各国軍隊と同等の呼称を採用することは、「戦力の不保持」を明記している。政府は長年、「自衛のための必要最小限度の実力組織」であるとして自衛隊を合憲としてきた。しかし、その説明自体、極めて苦しい解釈の上に成り立っている。実際、自衛隊は世界有数の軍事力を保有している。空母化された護衛艦、長距離ミサイル、敵基地攻撃能力など、実態はもはや「必要最小限」という言葉では説明できない段階にきている。そうした中で、「大将」「大佐」といった旧軍や各国軍隊と同等の呼称を採用すること

「誇り」を強調する危うさ

政府は、「諸外国と同じ呼称を用いることで、自衛官が誇りを持つて勤務できる」と説明している。しかし、その論理にも危うさがある。旧軍的な階級名を与えることでしか誇りを持てないという発

員、「参謀」を「幕僚」、「歩兵」を「普通科」、「駆逐艦」を「護衛艦」、「攻撃機」を「支援戦闘機」と呼んできた。それらは単なる言い換えではなく、「自衛隊は旧軍とは違う」という政治的・歴史的メッセージだった。しかし今回の変更は、その積み重ねを自ら崩すものだ。

旧海軍艦名と工廠の復活

自衛隊では長年、艦名を平仮名表記とすること、旧日本海軍と国民感情に配慮し、「軍艦」の威圧感を和らげる意図もあった。しかし近年、その歯止めは急速に薄れている。

理由に国営化論が浮上しているが、その本質は「国家が軍需生産を直接管理する体制」の強化にほかならない。

一度、軍需を国家主導で拡大し始めれば、経済も社会も軍事優先へ引きずられていく。戦前日本が歩んだ「国家総動員体制」の記憶を忘れてはならない。

高市首相は「普通の人は対象にならない」と答弁したが、普通の人と普通でない人をどうやって区別するのだろうか。

戦前日本では、「大本営発表」に象徴されるように、国家は都合の悪い情報を隠し、敗戦色が濃厚になっても「勝利」を宣伝し続けた。情報を独占した国家は、国民から真実を知る権利を奪い、世論を統制し、戦争へと動員していったのである。

「普通の国」という言葉の危険性

近年、改憲派は「日本を普通の国にする」と繰り返し返している。しかし、その「普通」とは何なのか。軍隊を持ち、敵基地攻撃能力を持ち、武器輸出を制限しない、軍需産業を拡大し、軍事を国家の中心に据えることが「普通」なのだろうか。

戦後日本は、憲法9条のもとで「軍事国家にならない」という選択をしてきた。その特殊性こそ、日

本が国際社会で築いてきた信頼の土台だった。「安全保障」を口実に、戦前への回帰を正当化してはならない。

情報強化は、外国勢力による諜報活動やサイバー攻撃テロへの対処を理由に挙げられる。だが、国家権力が「安全保障」を名目に、市民の自由と権利を制限する。最も侵害されやすいのは市民の自由と権利である。日本では過去に、国家機

「情報強化」が生む監視国家

政府は「インテリジェンス機能強化」を掲げ、「国家情報会議設置法」を5月27日、参院本会議で自民党や日本維新の会などの賛成多数により成立させた。しかし、この法案には重大な危険性が潜んでいる。それは、「国家による情報独占」と「国民監視」の強化につながりかねないという点である。

政府は、外国勢力による諜報活動やサイバー攻撃テロへの対処を理由に挙げられる。だが、国家権力が「安全保障」を名目に、市民の自由と権利を制限する。最も侵害されやすいのは市民の自由と権利である。日本では過去に、国家機

関による違法・不当な情報は極めて不透明である。

「外国勢力による影響工作」という曖昧な概念が拡大解釈される危険性がある。国民の自由と権利を守る事こそ、民主主義国家の根幹だ。安全保障を理由に、市民の思想・表現・知る権利が制限される社会を許してはならない。大切な事は、現憲法を遵守する事が政権の義務であるという事だ。

さらに看過できないのが、「国営工廠」復活論である。自民党安保調査会では政府への提言で「国営工廠の導入」を明記し、日本維新の会との合意文書にも関連施策が盛り込まれた。「工廠」とは、戦前の日本で兵器を大量生

産した国営軍需工場である。旧海軍の呉工廠や横須賀工廠は、戦争遂行を支えた中核施設だった。現在、防衛産業強化を

理由に国営化論が浮上しているが、その本質は「国家が軍需生産を直接管理する体制」の強化にほかならない。

一度、軍需を国家主導で拡大し始めれば、経済も社会も軍事優先へ引きずられていく。戦前日本が歩んだ「国家総動員体制」の記憶を忘れてはならない。

戦前日本では、「大本営発表」に象徴されるように、国家は都合の悪い情報を隠し、敗戦色が濃厚になっても「勝利」を宣伝し続けた。情報を独占した国家は、国民から真実を知る権利を奪い、世論を統制し、戦争へと動員していったのである。

戦前日本では、「大本営発表」に象徴されるように、国家は都合の悪い情報を隠し、敗戦色が濃厚になっても「勝利」を宣伝し続けた。情報を独占した国家は、国民から真実を知る権利を奪い、世論を統制し、戦争へと動員していったのである。

山 大阪労働学校・アソシエ 講座案内

全講座オンラインで開催・受講料無料

「大阪労働学校・アソシエ」(学長・斎藤日出治)は、資本主義を根源的に批判し、競争から共生協同型の政治・経済構造への転換と働く者が主人公となる社会をめざす事を基本理念とし、労働の尊厳を回復させる事を目標に2016年に開学。人間の真の解放を高く掲げた哲学・政治学・経済学や労働運動の歴史・実践などを教育の基本として、人材育成と研究を担ってきた。世界で進行しつつある社会的経済を広げる運動と連帯して、「社会との共生」「自立した地域社会の強化」「働き生活する場としての協同組合的社会的育成」という3つの理念を深める事も大きな課題としている。

※今期講座は全講座オンライン形式で開催。講座はすべて受講料無料。開講日未定の講座についてはホームページに随時掲載。

社会教育論講座

講師：奥村旅人(社会教育論研究者)



●第1回 7月16日(木)
「働きつつ学ぶについて考える」※10:00から

本講義では、京都人文学園および京都勤労者学園を題材にして、昼に

●第2回 11月4日(水)
「日本への『生涯教育』概念の受容を問い直す」※13:30から

近年、「リスキリング」や「学び直し」、「自己啓発」といった声のもと、「社会人」の生涯学習が脚光を浴びている。ここでは、

は労働している人々が、夜に「わざわざ」学ぶことの意味について考える。1949年に夜間部を設置した京都人文学園は、1957年に京都勤労者教育協会と合併し、京都勤労者学園へと改組して現在に至っている。1940、1950年代の社会運動の動向や学歴の変遷などを念頭に置きながら、両学園の足跡を辿ることで、「学ぶ」という営みが有した切実な意味について考察したい。

●第1回 5月28日(木)
「池田大作は社会主義者だったのだ!」

●第2回 6月19日(金)
「『人間革命』戦略の概要について」

●第3回 7月17日(金)
「池田氏の捉える日本仏教史と『人間性社会主義』との『共振』関係について」

●第4回 9月18日(金)
「池田氏の『対話主義』に支えられた、創価学会の支部活動イメージについて」

●第5回 10月23日(金)
「改めて、かつての『創共協定』プロジェクト挫折の深き意味を問い直すぞう!」

※各回13:00から



池田大作の思想について改めて考える

講師：清眞人(宗教哲学者)

池田氏は、1964年の公明党創立に合わせて、その創立の意義を明らかにすべく、『政治と宗教』を出版し、日蓮の「立正安国論」を現代に引き継ぐ思想として「人間性社会主義」と彼自身が名付ける「新社会主義」論を展開。党綱領にこの「人間性社会主義」を自分たちの政治的立場を規定する概念として掲げた。それは、ソ連・中国・北朝鮮

先人の遺骨を早急に故郷へ

講師：原井一郎(ジャーナリスト)



京都大が収蔵する大量の奄美人遺骨の返還を訴え7年が過ぎた。大学当局の閉鎖性によつて、返還どころか情報開示も進まず、唯2025年11月、同大みずから示したガイドラインなるものが示されただけで、遺骨の保

都市社会

講師：堀田泉(近畿大学名誉教授)



欧米や日本の都市形成の歴史を振り返りながら、人々が都市生活へと向かう考え方をたどり、現代都市の抱える問題を通じて未来を展望する。はじめに都市をとらえ

資本蓄積に抗する制御調整

講師：斎藤日出治(大阪労働学校学長)



資本主義の資本蓄積は互いに利害の対立する私的諸個人や階級集団の制御調整を通して事後的に遂行される。その過程で、富の不平等な分配、環境の深刻な汚染、資源の浪費、不必要な消費、大規模災害といった深刻な危機が誘発される。この

つたかをマックス・ウェーバーやゲオルク・ジンメル、シカゴ学派などを参考にしながら考える。

●第1回 5月23日(土)
「空間と場所」

●第2回 6月27日(土)
「場所から空間へ」

●第3回 7月25日(土)
「シカゴ派都市社会学とハワードの田園都市論」

●第4回 9月26日(土)

※各回16:00から

「マックス・ウェーバーの都市理論」

●第5回 10月24日(土)
「ゲオルク・ジンメルの都市理論」

●第6回 11月28日(土)
「日本の都市思想の出发点」

●第7回 1月23日(土)
「現代都市の変貌」

●第8回 2月27日(土)
「現代の都市社会の諸問題」

リレー講座 「社会闘争が切り開く未来」

社会闘争はかつてのようにならなくなり、階級闘争や民族闘争に集約されるのではなく、都市の住民運動、環境保全、食の安全性、マインリティの権利、反人種主義、反差別などに多様化し、広域化している。

本講座は、それぞれの運動に取り組んでいる当事者から発言をいただきながら、多様な運動経験を交流させつつ人々の多様な社会的つながりを探求する場としたい。

●第1回 5月12日(火)
「賃金生活者社会への道はなぜ阻まれたのか?」

●第2回 7月14日(火)
「レイシズムと性差別による制御調整」

●第3回 9月8日(火)
「経済と自然の生態学的な制御調整」

●第4回 11月10日(火)
「資本蓄積と地理的環境の制御調整」

※各回12:00から

①「関西生コンの労働運動の再生に向けて」
武建一(オールジャパン労働組合顧問)

②「管理職ユニオンの未来」
仲村実(管理職ユニオン・関西委員長)

③「農民運動の現状と今後」
大野和興(農業

④「熊野の朝鮮人虐殺とポスト・レイシズムの未来」
斎藤日出治(熊野朝鮮から歴史をつむぐ会)

⑤「フェミニズム運動の現在と未来」
講師未定

⑥「沖縄意見広告運動の総括から沖縄という闘いの核心と展望」
生田あい(社会運動家)

⑦「日本の左派主体の再生に向けて」
講師未定

●開講日未定

受講希望の方は下記へ
hide.saito1000@gmail.com

詳しい情報は大阪労働学校・アソシエのホームページをご覧ください。



地域アンシエーシエンの芽(86)

京都大学名誉教授 本山美彦

種子をめぐる勢力(32)

イランを知る(その一)

今こそ独善的大国の侵略に抵抗する多様な社会の建設を！歴史に残る明確で強靱な言葉を！

戦いを基本として、それでも短い停戦を繰り返しながら、各種民族の共存が続くと、それぞれの人種の違った言語系統も相互に文法と語彙(ごい)を導入し合うことになる。屈折語と膠着語(こうちゃくご)とが複雑に混じり合うようになったのもその事例である。英語は、「私」という単語が、「I」「My」「Me」と格変化する。単数の「私」が複数(たがひ)の「私たち」になると「We」に変わる。動詞も現在形過去形完了形というような時制変化に合わせて「do」「did」「done」と動詞の「語幹」(root:stem)自体が変化する。これを「屈折する」(inflect)という。英語は、屈折するという「屈折語」(inflected language)と違って「インド・ヨーロッパ語族」(Indo-European language)に属する。それに対して日本語では、名刺も動詞も語幹は変化しない。単数形の「私」という単語は、まったくそのまま変化せず、私は「私の」・私に「となる。つまり、助詞を単語の後尾に配置すれば、「私」という語幹は、主語にも、目的語にも変化できる。また、「たち」という複数を表す別の名刺を付加すれば、「私たち」という複数になる。動詞も、日本語では、時制の差異によって変化することがない。日本語には、「おくりがな」が「活用語尾」として「ひらがな」で付けられる。「変化させない語幹」は漢字で表記され、その後ろに続く「変化する部分」(語尾という)がひらがなで表現される。

例えば「動」という語幹。この語幹を問わずに「く」という「おくりがな」を付けると「動く」という現在形になる。過去形

る明確で強靱な言葉ではなく、言葉としての体裁をなしていないのである。例を挙げよう。かなり以前から使われ、今では日常化している言葉としては、以下のものがある。

「サボる」(sabotage+する)、「ダブル」(double+する)、「スキンシップする」(skin+ship+する)「肌」という名詞を「頬づりする」という動詞にさせている)、「リフォームする」(reform+する)、「レベルアップする」(level up+する)、「メイクする」(make+する)、「化粧をする」(「ノックする」(knock+する)、「ドアを叩く、野球用語のノックする」。

品詞を無視するとともに、言語のとももの意味を大幅に弱める和製英語も出てきた。以下、その例。「ガソリンする」(gasoline+する)、「テンパる」(temper+する)「余裕がない」(「ディスる」(disrespect+する)「軽蔑する」(「ワンマンする」(one-man+する)「一人で行なうこと」)、「リフォームする」(reform+する)「改裝する」(「ドライブする」(drive+する)「車を運転して楽しむ」等々。

これらに和製英語は、まず少女たちが使い、それが少年たちに感染し、成年、老人へと伝播した。すでに多くの和製英語が日用語化している。料理の世界では、フランス語もどきの言葉が、それこ

そ氾濫している。これが影響力のある文化に人々は染まるということである。

膠着語の源流・チュルク諸語

現在、中東の高原地帯に住むインド・ヨーロッパ語族に属している人の多くが、膠着語出自の語彙を数多く使っている。それらの語彙には、共感と尊敬が込められている。膠着語は以下のように2つの特徴を持つ。

- (1) 名詞や動詞の語幹を変化させずに、「結合語」(compound word)とも呼ばれる語尾を引く付ける。
- (2) 「主語、動詞、目的語」との間の語順は、インド・ヨーロッパ語族の「主語→動詞→目的語」ではなく、「主語→目的語→動詞」となっている。

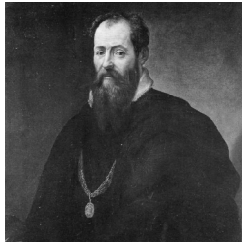
膠着語としてこうした特徴を共有する言語は「語族に分類すれば「チュルク諸語」(Turkic languages)と呼ばれている。チュルク諸語は、「トルコ語」(Turkish)、「アゼル

バイジャン語」(Azerbaijani)、「ウズベク語」(Uzbeki)、「カザフ語」(Kazakh)、「キルギス語」(Kyrgyz)、「ウイグル語」(Uyghur)、「アラビア語」(Arabi)など、東欧から中央アジア、北アジアに広がる40種類以上の言語の総称である。

膠着語の特徴を持つ言語を母語としている人々は、日本人を含めて、世界中で数億人以上いる。例えば、チュルク諸語から生み出されたアラビア語の語彙は、現在でも世界の尊敬を集めて、広く使われている。特に、数学、化学、貿易、天文学などの学術分野に於いて多数存在している。アラビア語の語彙は、「al」(アル)で始まるものが多い。「al」はアラビア語の定冠詞で英語の「the」に相当する。中世では「アラビアの学

問水準はヨーロッパよりはるかに高かった。このことを自覚していたヨーロッパ人たちは、ルネッサンスに走ったのである。ルネサンス(Renaissance)という英語になっている語彙は、綴りも発音もフランス語そのままである。フランス語の語彙は、「re-」(再び)、「naissance」(誕生)、「ance」(する)といった意味を持つ。古代の知恵や文化を蘇らせようとの運動を表す語彙である。そのフランス語の語彙は、「再生」・「復活」を意味するイタリア語の「リナシ

チュルク諸語の分布



ジョルジョ・ヴァザーリ

の弟子である。ヴァザーリは「ミケランジェロを当時の最高の画家・彫刻家として称えた」(https://dcc.yamaguchi-u.ac.jp/~fujikawa/16/ah1600.htm)。

代表的なアラビア語由来の最先端語彙

「アラビア化された単語」(Arabicized words)の事例を以下に記す。algebra(代数学)「algorithm(アルゴリズム)」「alcohol(アルコール)」「alkali(アルカリ)」「chemistry(化学)」「coffee(コーヒー)」「candy(キャンディ)」「sugar(砂糖)」「magazine(雑誌)」「mummy(ミイラ)」「safari(サファリ)」「azimuth(方位角)等々。Alcoholの語源は「アラビア語」(alkuh)「アルコール」に由来している。もともとは「目を引く黒色の粉末」(特に化粧用のアンチモン粉末)を指していたが、後に「細かい粉末」(蒸留によって精製された物質)へと転じ、最終的に酒の成分(酒精)を指すようになったと言われている。

こうで使った「アンチモン」(Antimony)とは、「半金属」(metalloid)「メタロイド」に分類される銀白色で金属光沢を持ち、硬くて脆い結晶構造が特徴の元素である。古代からアイシャドウや合金として広く使われてきた。「化

学」は、英語で「Chemistry」と言うが、これは「錬金術」(Alchemy)から来た言葉であると考えられている。Alchemyも「アラビア語」(al-kimia)「アル・キミア」をヨーロッパ風に導入したものと思われる。アラビア語の「kimia」という言葉は「古代エジプト語」(Ancient Egyptian)の「kemi」から来ている。「kemi」は「ナイル川を「黒い裂け目」のように見た古代エジプトの宇宙論の基礎でもあったと言われている」(https://kitchen.co.jp/blog/2014/04/chemistry.php)。

本稿で強調したかったこと

それにしても、現在の日本の最先端の語彙のほとんどは、英語を翻訳して漢字に移し替えただけのものである。「漢字」が使われても、「和語」が専門用語として登場することはなきに等しい。最先端の専門家が日本にいないわけではない。日本人の多くは、名前だけで舶来ブランドのみを好み、「made in Japan」を無視してしまうのである。それで、日本で育ちながら日本風土に嫌気をさしたかなりの数の専門家が、日本の既存の組織から脱出して、海外に流出するという哀しい現実には、私たちは直面している。



『白バラの祈り』 ゾフィー・シヨル、最期の日々

ロシアによるウクライナ侵攻、さらにアメリカとイスラエルによるイラン攻撃など、世界は再び戦争の影に覆われつつある。戦争は「国家」や「安全保障」の名で始められるが、命を奪われるのは常に無名の市民だ。戦時体制が強まる時、国家は異論を敵視し、沈黙を強いる。ナチス・ドイツに抵抗し、21歳で処刑された女子学生ゾフィー・シヨルを描く映画『白バラの祈り』ゾフィー・シヨル、最期の日々(メルク・ローテムント監督/2005年)は、「自由とは何か」「国家に従うとはどういうことか」を、現代を生きる我々に鋭く問いかける。

「祖国防衛」の熱狂 の中で

映画の舞台は1943年2月のドイツ。ナチス政権はヨーロッパを席巻していたが、スターリンググラード攻防戦で敗北し、戦局は大きく傾き始めていた。しかしヒトラー政権は敗戦の兆しを隠し、国民に「総力戦」を叫び続ける。街には愛国のスローガンが溢れ、反対意見は「国家への裏切り」とされた。その中で、ミュンヘン大

学の学生たちによるレジスタンス組織「白バラ」が活動していた。中心人物の一人がゾフィー・シヨルである。兄のハンスらとともに、戦争反対や独裁批判を訴えるビラを作成し、密かに配布していた。

尋問室で繰り広げられる心理戦

本作最大の見どころは、ゾフィーとゲシュタポの尋問官であるローベルト・モールとの対決である。モールは最初、若い女子学生を軽く見て、「仲間を売れば助けてやる」「感情に流されたのだろう」と逃げ道を示しながら揺さぶりをかける。しかしゾフィーは、恐怖と葛藤を抱えながらも、驚くほ



映画「白バラの祈り」から

ゾフィーたちはテロリストではない。ただ「戦争は間違っている」と訴えた学生に過ぎない。しかしナチス・ドイツでは、それ自体が死刑に値した。

映画終盤に登場する人民裁判所長官ローラン・トフライスラーは、その象徴的存在だ。怒号を浴びせ、被告に弁明を許さず、裁判を「国家への見せしめ」に変えていく。法は正義を守るためではなく、国家権力を維持する武器へと変貌していた。

この構図は、決してドイツだけの問題ではない。戦前の日本でも、治安維持法のもとで反戦思想や社会運動は徹底的に弾圧された。特高警察による監視、逮捕、拷問、転向強要。国家総動員法によって社会全体が戦争遂行体制へ組み込まれていた。「非国民」という言葉が人々を沈黙させた。

重要なのは、こうした体制が一夜にして完成したわけではないという点だ。「国家の危機」「安全保障」「秩序維持」という名目で、少しずつ自由が削られ、監視が強化され、異論が排除されていった。その積み重ねの先に全体主義があった。

「法律」が人を追い詰める恐ろしさ

「白バラの祈り」が現代において重要なのは、この映画が「過去の悲劇」で

終わらないからである。

頑張れ尾上部屋 期待の新弟子が入門

大相撲五月場所(両国国技館)は、2横綱2大関が相次いで休場する異例の展開となった。千秋楽まで7人に優勝の可能性が残るという近年まれに見る接戦の末、12勝3敗で並んだ小結・若隆景(荒汐部屋)と大関・霧島(音羽山部屋)による優勝決定戦が実現。ともに度重なる怪我に苦しみ、二時は番付を大きく落とした力士同士の対決は、多くのファンの胸を打った。

決定戦を制した若隆景は、2022年春場所以来25場所ぶり2度目の優勝。幕下転落からはい上がって掴んだ賜杯は努力と執念の結晶といえる。一方の霧島も復活を強く印象づけ、今後の角界を占う意味でも記憶に残る場所となった。



新序出世披露に臨む宇座(前列右から2人目)

五月場所 尾上部屋力士成績

☆印は勝ち越し力士		四股名		成績
【幕下】		番付		
西8枚目	北天海	3勝	4敗	
西17枚目	伊波	2勝	5敗	
東28枚目	城間	3勝	4敗	
東57枚目	穂高	1勝	6敗	
西57枚目	春山	☆4勝	3敗	
【三段目】		番付		
東61枚目	坂林	3勝	4敗	
東72枚目	照寶	2勝	5敗	
【序二段】		番付		
東26枚目	高馬山	☆5勝	2敗	
東27枚目	九鬼王	2勝	5敗	
西38枚目	高倉山	2勝	5敗	
西66枚目	玄武丸	3勝	4敗	
東90枚目	富士の輝	3勝	4敗	
【序ノ口】		番付		
西3枚目	寅ノ丸	☆4勝	3敗	
【番付外】		番付		
前相撲	宇座			

※七月場所(名古屋場所)の番付は6月29日に発表



尾上親方(左)と握手する宇座(右)

自衛隊から力士へ 異色の新弟子・宇座

5月に尾上部屋へ入門した宇座寿音(うざしゅおん)は、沖縄県宜野湾

カいのではと笑い、「体格を生かすなら押し相撲」と理想像を描く。「自分に関わってきた人のために、どんどん勝っていきたい」と意気込んだ。

夏場所3日目(5月12日)に前相撲で初土俵を踏み、8日目(5月17日)に新序出世披露。七月場所から番付に四股名が載る。